

2025 年度 一般選抜 (前期) 2月2日

国語

〈注意事項〉

- 1 解答はじめの合図があるまでは、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 問題は1ページから13ページまでです。
- 3 監督者の指示に従い、解答用紙に次の事項を記入し、マークしてください。
記入、マークするときは黒鉛筆 (H, F, HB に限る) を使用し、誤ってマークした場合は消しゴムでていねいに消し、新たにマークし直してください。
①解答用紙の氏名・受験番号欄に「氏名」「受験番号」を記入し、受験番号マーク欄にマークしてください。

※記入例（受験番号 410324 の場合）

氏名	科学大					
受験番号	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
	4	1	0	3	2	4
受験番号マーク欄						
(1)	0	1	2	3	●	5
(2)	0	●	2	3	4	5
(3)	●	1	2	3	4	5
(4)	0	1	2	●	4	5
(5)	0	1	●	3	4	5
(6)	0	1	2	3	●	5

- ②入試区分欄の「一般前期 (2/2)」をマークしてください。

入試区分	一般前期 (2/2)
教科	国語 09

- ③解答用紙は折り曲げたり、汚したりしないでください。
- ④解答用紙は、表面がマーク式の解答欄、裏面が記述式の解答欄になっています。
- 4 問題冊子は持ち帰ってください。

問題一 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

「私」というものは不思議なものである。誰もが I 自明のこととして「私」という言葉を用いているが、われわれはどれほど「私」を知っているだろうか。

インドの説話に次のような話がある。ある旅人が空家で一夜をあかしていると、一匹の鬼が死骸を担いでそこへやつてくる。そこへもう一匹の鬼がきて死骸の取りあいになるが、いつたいどちらのもののかを聞いてみようと、旅人に尋ねかける。旅人は恐ろしかつたが仕方なく、前の鬼が担いできたと言うと、あとの鬼が怒つて脚をぬくと、また前の鬼が死骸の脚をくつつける。このようにして死骸の手を持ってきて代りにつけてくれた。あの鬼は怒つて脚をぬくと、また前の鬼が死骸の脚をくつつける。このようにして旅人と死骸の体とがすっかり入れ代わってしまった。二匹の鬼はそこで争いをやめて、死骸を半分ずつ喰つて出てしまつた。驚いたのは旅人である。今ここに生きている自分は、II ほんとうの自分でだろうかと考えだすとわけがわからなくなってしまうのである。

この話は「私」ということの不可解さをうまく言いあらわしている。このように考えだすとまったく解らなくなる。ここでは体のことになつていて、自分にそなわつていて、自分にそなわつていて、そこに「私」というものが残るのだろうか。(イ)しかし、そのようにして、自分にそなわつていて、そこに「私」というものが残るのだろうか。(イ)われわれが精神病の人たちの話を聞くと、ときに、彼らは自分と同じ人間がこの世にもう一人存在していると主張したり、自分は××の生まれ代りであると確言したりする。これをわれわれは異常なことと感じる。自分というものはこの世にA の存在であり、過去にも未来にも同じものは存在しないと確信しているのである。ここに「確信」という言葉を用いたが、実際これは積極的に「確証」することがむずかしいことである。われわれは確証なしに、これらのことむしろ自明のこととして受け入れている。

ここに「われわれ」という主語をバクゼンとした形で用いたが、実のところ、この「われわれ」には相当限定を加えなければならぬ。というのは、現在においても、輪廻転生⁽¹⁾を信ずる民族や集団も相当存在するからである。われわれ日本人にしても、相当の長期にわたつて輪廻の思想を受け入れてきたのである。(口)

近代人は合理的科学的な思考に基盤をおき、輪廻の考え方を拒否している。それに基づく数々の迷信を笑いものにすることができるのである。しかし、近代人にとって、「私」はどこから来てどこへ行くのか、というのは厄介な問題である。近代の先端をゆくアメリカにおいて、「私」の根(ルーツ)を探し求めることに異常な関心がむけられているのも、まことに興味深い。「ルーツ」はあくまで外

的な根を探すことには焦点づけられているが、そこに、「私」という存在の基礎を知ろうとする内面的な問いかけが象徴的にはたらいでいると考えられる。

「私」について考えはじめると、常にこのような深刻な疑問が生じてくるが、ここではしばらくこのような問題をカツコ(2)にいれて、もつと常識的なところから出発してみよう。もつとも、いつかはこのような問題に立ち帰つて考えねばならないと思われるが。

(ハ)

「私」ということについて、常識的な観点から考えるならば、「私」の知つているかぎりにおける「私」ということから出発することになるだろう。

われわれは自分のした行為や、考えたこと、感じたことなどについて、「私がしたこと」とか「私の考え」とかなどと表現する。この「私の」、「私が」という主体、つまり、人間の行為や意識の主体として「自我」ということを考えることにしよう。

このように考えられる自我はいろいろなはたらきをしている。まず、外界の知覚ということがあげられる。自我は視覚、聴覚などの感覚を通じて外界を認知する。次に、内界の認知ということもある。自分の内的な欲望や感情を認知する。そして、これらの経験は、記憶として体系化し保存しておかねばならない。しかし、これらのこととは複雑にからみあつた過程である。つまり、記憶体系に基づいて知覚したものに判断を下している反面、新しい知覚に基づいて、記憶体系が改変されることもあるからである。

(ニ)

主体としての自我は以上のような機能を果たしつつ、自ら意志決定をなすことができる。そして、自我は運動機能とも結びついており、自らの意志決定に基づいて、自らの体を動かすこともできるのである。外的な現実と内的な欲望、感情などを認知した上で、両者のあいだに大きい摩擦を生じないように適切な行為を選択し、遂行していかねばならない。われわれが短時間のうちになにげなく行つてている行為にしても、自我の機能として分解して考えてみると、予想外の複雑な過程(3)であることが解るであろう。

自我はまた、ある程度の統合性を有することが必要である。つまり、ひとつのまとまった人格として存在するためには、その中に大きい矛盾をもつことが許されない。自我はそこで自分の統合性を保持するために、自分自身を防衛する機能ももたねばならない。

(ホ)

III、父親を絶対的な存在として尊敬し、それを心のシチュウ(3)として大きくなってきた人があるとしよう。その人がなにかの機会に父親の弱点を知ったとき、その人の自我は大きい危険にさらされている。つまり、その事実は彼の自我の統合性をおびやかすからである。このとき、一番簡単な防衛の方法は、その事実を何かの誤りだと否定したり、あるいは忘れてしまうことである。

自我は、そこで、父親の弱点の存在を無視しないとすると、大きい努力を払いながら、自分の体系の組み変えを試みなくてはならない。事実、そのようにして自我は危険と対抗しつつ自ら発展してゆくのである。

自我はこのように考えると、その存在をそのまま続行するために、新しい経験を取り入れるのをハイジョしようとする傾向をもつが、人間の心全体としては、何か新しいことを取り入れて自らを変革しようとする傾向をもつものであり、このような相反する傾向を有しているところが、人間の心の特徴であるとも考えられる。

前に述べたように、われわれの自我は、ある程度の主体性と統合性をもつて安定を保っている。しかし、自我の統制に服さないコンプレックスは、それに対しているいろいろと反逆を試みる。

自我とコンプレックスとの関係は、たとえてみれば政党の中の派閥のようなものである。自我はその中の主流派であり、一般的には他の派閥も主流派の決定に従っているが、派閥の利害が一定以上に犯されそうになると、いろいろと反撥⁽⁴⁾したり、反逆したりすることになる。主流派はそこで派閥と交渉し、そこになんらかの妥協点を見いだしてゆくのである。政党の党首はすなわち主流派の長であるが、彼は党内における状勢を早くキャッチし、そこに全体的なハイコウ⁽⁵⁾状態を維持しつつ、自分の派閥の発展を図らねばならない。このことは、自我がコンプレックスに対して行っている仕事と非常によく似通っている。

われわれの自我はその存在が危険にさらされていることを予感するとき、不安を感じる。その際、危険をもたらす対象は明確に認知されていない。IV、その対象がはつきりとしたとき、われわれの感情はそれに対する恐怖に変化する。自我に対する脅威がそれほど強くなく、自我の内部になんらかの不整合を生ぜしめるようなときは、われわれは不愉快になつたり、いらいらしたりする。

朝起きて新聞を見ているうちに、なんとなくいらいらしてくるときがある。いくら考えても原因が解らないときもある。しかし、あとで反省してみると、新しく大臣になつて騒がれている人の年齢が自分と同じであることを知ったトタンに、劣等感コンプレックスが刺戟⁽⁶⁾されて、自我存在が多少おびやかされていたことが判明するときもある。われわれがいらいらさせられるとき、われわれはなにかを見とおせずにいるのだと考えてみると、まず間違いはない。自我の光のおよばないところで、なにかがうごめいているのである。

(注) *輪廻転生……生き物が何度も生死を繰り返し、新しい生命に生まれ変わること。

河合隼雄 『無意識の構造』

問一 傍線部(1)～(6)と同じ漢字を使うものはどれか。それぞれ最も適当なものを、次の各群の中から一つ選びなさい。

(1) バクゼン

- ① ソクバクから解放される。
② 飛行機のバクオンで窓ガラスが震動した。
③ オンライン上で行われるトバクは犯罪である。
④ サバクが国土の半分近くを占める。
⑤ ビールはバクガから醸造される。

(4) ハイジョ

- ① ハイソウする敵軍を追う。
② ハイキガスは空気を汚染する。
③ 有権者に対するハイシン行為。
④ 何事も天のハイザイだ。
⑤ お知恵をハイシャクしたい。

(2) カツコ

- ① 群れからコリツした象。
② 彼はコサンの社員だ。
③ コジンをしのぶ。
④ 白球がコセンを描いて飛ぶ。
⑤ コキヤクをバーゲンに招待した。

(5) ヘイコウ

- ① 国家のコウボウに関わる問題。
② 勢力のキンコウが崩れる。
③ 彼は恐怖で手足がコウチヨクした。
④ コウシヨウな趣味のもち主。
⑤ その小川は野原をダコウしている。

(3) シチユウ

- ① 栄養剤を鼻からチユウニユウする。
② 車をデンチユウにぶつけた。
③ 占領国にチユウリユウする。
④ 記念金貨をチユウゾウする。
⑤ 国家へのチユウセイを誓う。

(6) トタン

- ① この国はまだ発展のトジョウにある。
② トトウを組む。
③ ホクト七星のおかげで方角がわかる。
④ 患部に薬をトフする。
⑤ 海外トコウの手続きをとつた。

問二 空欄 I ～ IV に入る語として最も適当なものを、それぞれ次のうち一つ選びなさい。ただし、同じものを複数回使つてはならない。

- ① いつたい ② ついでに ③ たとえば ④ つまり ⑤ まるで ⑥ しかし

問三 空欄 あ に入る四字熟語として最も適当なものを、次のうち一つ選びなさい。

- ① 三面六臂 ② 遮二無二 ③ 一蓮托生 ④ 朝三暮四 ⑤ 一騎当千 ⑥ 唯一無二

問四 本文からは次の二文が抜けている。元の場所に戻す場合、（イ）～（ホ）のどこに入るか。最も適当なものを、①～⑤の中から一つ選びなさい。

それは、らつきょうのように皮をはいでゆくと、ついに実が残らないものではなかろうか。

- ① (イ) ② (ロ) ③ (ハ) ④ (ニ) ⑤ (ホ)

問五 傍線部A「『われわれ』には相当限定を加えなければならない」とあるが、それはなぜか。六十字以内で説明しなさい。ただし、句読点、記号も字数に含む。

問六 傍線部B「このような深刻な疑問」とあるが、どのような疑問か。最も適当なものを、次のうち一つ選びなさい。

- ① 「ルーツ」を探すことによって、「私」という存在の基礎を本当に知ることができるのであるのかという疑問。
② 輪廻の考えに基づく数々の迷信を笑いものにするわれわれの姿勢は、はたして正しいのかという疑問。
③ アメリカにおいて、なぜ「私」の根（ルーツ）探しに異常な関心がむけられているのかという疑問。
④ 近代人における、「私」はどこから来てどこへ行くのかという、「私」という存在の基礎に関わる疑問。
⑤ われわれ日本人は、どうして相当の長期にわたって輪廻の思想を受け入れてきたのかというの疑問。

問七 傍線部C 「複雑な過程」とあるが、どういうことか。最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① 主体としての自我が、自らの意志決定に基づいて、適切な行為を選択し、遂行した上で、外的な現実と内的な欲望、感情などを認知していること。
- ② 自我が、自らの記憶体系に基づいて知覚したものに判断を下している反面、自らの欲望や感情に基づいて、記憶体系を自由に改変していること。
- ③ 内的な欲望や感情を抑圧した自我が、ひとつのまとまつた人格として存在するように、外的な現実と折り合いをつけながらふるまつてていること。
- ④ 自我が、外界の認知と内的な欲望や感情のあいだに食い違いが生じないように、自らの意思決定に基づきながら、適切な行為を選び、行うこと。
- ⑤ 人間の行為や意識の主体としての自我が、運動機能とも結びついており、自らの内的な欲望や感情に抗いながら、自らの体を動かしていること。

問八 本文の内容と合致しているものはどれか。最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① インドの説話は、自分と死骸の体を入れ代わってしまったにもかかわらず、「私」という意識が残っている旅人のとまどいを描いている点で、自我というものが永遠に生き残り続けることの不可解さをうまく言いあらわしている。
- ② 父親を絶対的な存在として尊敬しながら大きくなってきた人が父親の弱点を知ると、その人の自我は大きい危険にさらされるが、その事実を何かの誤りと無視することにより、危険と対抗しつつ自ら発展してゆくことができる。
- ③ 自我とコンプレックスの関係は、政党の中の主流派と他の派閥の関係になぞらえられ、政党の党首が党内の状勢をすばやくキヤッチしながら自分の派閥の発展を図る行為は、自我がコンプレックスに対して行う仕事と似ている。
- ④ われわれの自我はその存在が危険に直面していることを予感すると不安を感じるが、その脅威がそれほど強くない場合は、それを取り入れて自らを変革しようとするものであり、このような傾向は人間の心の特徴と考えられる。
- ⑤ われわれが不愉快になつたり、いらいらしたりするのは、自分のなかの劣等感コンプレックスが刺戟されて、自我存在がおびやかされることが原因であるため、精神の安定を保つにはコンプレックスを捨てることが大切である。

問題二 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

一つの文章は、一つもしくは幾つかの単語から成り立っているのでありますから、単語の選択のよしあしが根本であることは、申すまでもありません。□I□、その選び方についての心得を申しましょうなら、

異を樹てようとするな

と云うことに帰着するのであります。それを、もう少し詳しく、箇条書きにして申しますと、

- 一 分り易い語を選ぶこと
- 二 なるべく昔から使い馴れた古語を選ぶこと
- 三 適当な古語が見つからない時に、新語を使うようすること
- 四 古語も新語も見つからない時でも、造語、——自分で勝手に新奇な言葉を⁽¹⁾持⁽²⁾えることは慎むべきこと
- 五 抱り所のある言葉でも、耳遠い、むずかしい成語よりは、耳馴れた外来語や俗語の方を選ぶべきこと等であります。(イ)

本来、或る一つのことを云い現わすには、そのことを意味する幾種類かの言葉、即ち同義語と云うものを出来るだけ沢山知つていることが必要であります。それにはやはり多くの書を読んで、多くの単語を覚え、いつでも利用出来るように記憶の蔵に仕入れて置くのに越したことはありませんが、しかしよほど記憶力のよい人でない限り、無数の同義語を時に応じて思い出すことは困難でありますから、同義語の辞典や、或は英和字書の如きものを□a□に備えておくことも便利であります。ただこの場合、字引は自分がよく知つていて即座には思い出せない言葉を引き出すヨウトに使うのでありますて、いくら字引にあるからと云つて自分に馴染^(なじみ)のない言葉、または世間に通用しないむずかしい言葉を使うことは、よくよく已^(や)むを得ない時の外は、避けなければなりません。それから、字引さえ^(ひもと)繙けばあらゆる言葉が見出されると思うのも間違いでありますて、字引に載つていな^(たゞ)い俗語や、隠語や、方言や、外来語や、新語の類で、時には甚だ適切な、生き生きとした感じを持つた言葉があることを忘れてはなりません。

(口)

仮に皆さんのが、「散歩した」と云う意味を伝おうとする時、ただ「散歩した」と書いてしまえば済むようなものの、そういう書く前に「散歩する」と云う語の同義語を^(ひ)一通り調べて御覧なさい。するとさしあたり、

散歩する

散策する

漫歩する

そぞろ歩きする

杖つえを曳ひく

ぶらつく

プロムナードする

等の語を思い出されるであります。そこで皆さんは、これらの同義語のうち孰れが最も今の場合に適しているかを考えて、それを選ぶようにするであります。

散歩はほんの一例でありますて、かかる些細な事柄の時は孰れを選んでも大した違ひはないように思われるであります。が、しかし言葉数の少ない日本語で、散歩と云うような簡単な事柄においてすら、即座に七つの同義語が見出だされるのでありますから、一般に同義語と云うものは案外数が多いのであります。それ故、無数の同義語の中から、その場にぴたり当て嵌はまる言葉を選び出すことは、決してやさしい仕事ではありません。或る場合には「この語を措おいて他になし」と云うことが極めて明瞭いきょうであつて、少しの躊躇ちゆううちよも要しないことがありますけれども、大概は二つも三つも似たような言葉がありますので、サイタクに迷うものであります。(ハ) そのことについて思い出しますのは、たしか仏蘭西フランスの或る文豪の云つたことに、「一つの場所に当て嵌はまる最も適した言葉は、ただ一つしかない」と云う意味の言がありますが、この、最適な言葉はただ一つしかないと云うことを、よくよく皆さんは味わうべきでありますて、数箇の似た言葉がある場合に、孰れでも同じだとお思いになるのは、考え方が緻密ちみつでないのであります。なお注意して思いを潜め、考えを凝らして御覧になると、必ず孰れか一つの言葉が、他の言葉よりも適切であることがお分りになります。たといそれが散歩の如き些細な事柄でありますとも、「散歩」と、「散策」と、「そぞろ歩き」と、「ぶらつき」等々と、孰れを使つても全然同じであると云うことは有り得ない。或る場合には「散歩」よりも「散策」の方が、また或る場合には「そぞろ歩き」の方が、一層適するはずでありますて、^A そう云う僅かな言葉の差異に無神經であつたり、そう云う感覚が鈍かつたりしたのでは、よい文章を作ることは出来ません。

然らば、或る一つの場合に、一つの言葉が他の言葉よりも適切であると云うことを、何に依つて定めるかと申しますのに、これがむずかしいのであります。第一にそれは、自分の頭の中にある思想に、最も正確に当て嵌はまつたものでなければなりません。II 、最初に思想があつて然る後に言葉が見出みいだされると云う順序であれば好都合でありますけれども、実際はそうと限りま

せん。その反対に、まず言葉があつて、然る後にその言葉に當て嵌まるように思想を纏める、言葉の力で思想が引き出される、と云うこともあるのであります。一体、学者が学理を論述するような場合は別として、普通の人は、自分の云おうと欲する事柄の正体が何であるか、自分でも明瞭には突き止めていないのが常であります。そうして實際には、或る美しい文字の組み合わせだと、または快い語調だと、そう云うものの方が先に頭に浮かんで來るので、試みにそれを使ってみると、従つて筆が動き出し、知らず識らず一篇の文章が出来上る、即ち、最初に使つた一つの言葉が、思想の方向を定めたり、文体や文の調子を支配するに至ると云う結果が、しばしば起るのであります。〔三〕「そぞろ歩き」の代りに「すずらありき」と書いたとしますと、それに釣られて、文体が和文調になつたり、また「プロムナード」と云う語を使うと、それをキッカケにハイカラな文章を書いてしまふ。いや、それどころではありません。おかしなことを申すようでありますと、小説家が小説を書く場合に、偶然使つた一つの言葉から、最初に考えていたプランとは違つた風に物語の筋が歪曲わいきょくして行く、と云うような事態すら生ずるのでありますと、もつと本当のことを申しますなら、多くの作家は、初めからそうはつきりしたプランを持つてゐるのではなく、書いているうちに、その使用した言葉や文字や語調を機縁として、作中の性格や、事象や、景物が、自然と形態を備えて來、やがて渾然たる物語の世界が成り立つようになります。されば、伊太利の文豪ガブリエル・ダンヌンチオは、老後には常に字引を読んでいろいろな単語に眼を曝さらし、それらの単語からさまざまなる作品の着想を得たと云う話を、かつて人から聞いたことがあります、これは私自身の経験に徴ちようしましても、恐らく嘘うそではありますまい。私の青年時代の作に「麒麟きりん」と云う小篇がありますが、あれは実は、内容よりも「麒麟」と云う標題の文字の方が最初に頭にありました。そうしてその文字から空想が生じ、ああ云う物語が発展したのでありました。（二）ですから、一つの単語の力と云うものも甚だ偉大でありますと、古いにしえの人が言葉に魂があると考へ、言靈ことだまと名づけましたのもまことに無理はありません。これを現代語で申しますなら、言葉の魅力と云うことでありまして、言葉は一つ一つがそれ自身生き物であり、人間が言葉を使うと同時に、言葉も人間を使うことがあります。

かく考えて來ますならば、言葉の適不適を定めますには、かなり複雑なシリヨ(5)が必要であることがお分りになるであります。つまり、単に意味が正確であるとか、思想にぴったり当て嵌まるとか云うことばかりで極きめるわけには行きません。或る場合には、思想の方を言葉に当て嵌めて纏まりをつけるのが賢いこともありましょし、或る場合には、言葉に使役(6)され過ぎて思想が歪曲されないように警戒しなければなりません。結局、言葉はその一箇所だけではなく、文章全体に影響を及ぼすものでありますから、絶えず全体との釣合つりあい、調和不調和を考え、適不適を極めるのであります。（ホ）そう云う点で、巧い言葉が使つてあると思うのは、志賀直哉氏の「万曆赤絵ばんれいあかえ」という短篇の冒頭に、

京都の博物館に一対になつた万曆の結構な花瓶がある云々

とある、その「結構な」と云う形容詞であります。この場合、この花瓶を褒めるのに、「見事な」、「立派な」、「芸術的な」等種々の言葉がありましようけれども、それらの孰れを嵌めてみましても、到底「結構な」と云う一語が含む幅や厚みには及ぶべくもありません。この語はその花瓶の美しさを適確に云い現わしていると同時に、全篇の内容や趣向をも暗示するほどのひろがりを持ち、まことによく働いているのであります。こう云う簡単な言葉使いに、□ b □ が窺われる所以であります。

思うに、昔から文章を彫琢すると云い、□ c □ すると云いますのは、その大半が単語の選択に費される苦心を指すのであります。まして、私なども、何十年来この道に携わつておりながら、未だに取捨に迷うことが多く、若い時と同じ辛労を覚えるのであります。ただ、若い時分と違うところは、以前は言葉の魅力に釣られて使役されることをあえて厭いませんでしたが、昨今は己を引き締めて、言葉を使役するよう努めます。これは畢竟、青年時代には西洋かぶれしていたために、言語に蔭のあることを嫌い、ひたすら緻密に、明晰に、新鮮に、感覚的にと心がけ、なるべく人眼につき易い□ d □ な文字を選ぶことに骨を折りましたが、次第にさような書き方が卑しいものであることを悟り、今ではその反対に、出来るだけ意味を内輪に表現し、異色を取り去ろうとする結果であります。

(注) *徴する……照らし合わす。

*畢竟……つまるところ。

谷崎潤一郎『文章読本』

問一 傍線部(1)～(6)のカタカナを漢字に改め、漢字は読みをひらがなで記しなさい。

問二 空欄 I ～ III に入る語として最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選びなさい。ただし同じものを複数回使つてはならない。

- ① および ② かえつて ③ たとえば ④ しかしながら ⑤ そこで ⑥ なぜなら

問三 本文からは次の二文が抜けている。元の場所に戻す場合、(イ)～(ホ)のどこに入るか。最も適当なものを、①～⑤の中から一つ選びなさい。

ですが、そう云う場合、もし皆さんがそれらの二三の類似語を眺めつつ、孰れを取つても同じことだ、格別の差異はない、と云う風に考えられるとしたならば、それは十中の八九まで、言葉や文章に対する皆さんの神経が遲鈍なのであります。

- ① (イ) ② (ロ) ③ (ハ) ④ (ニ) ⑤ (ホ)

問四 傍線部A 「そう云う僅かな言葉の差異に無神經であつたり、そう云う感覺が鈍かつたりしたのでは、よい文章を作ることは出来ません」とあるが、どのようなことか。最も適当なものを、次のなかから一つ選びなさい。

- ① その場に適した言葉を見つけ出すためには、辞典を使いながら出来るだけ沢山の類似語を調べるのが便利であるが、俗語や隠語の方が生き生きとした感じを持つていてことを忘れてはならないということ。
- ② 仏蘭西の文豪が云つているように、すべての場所の状況は相違しているのであるから、同義語をいくら集めたとしても最適の言葉を見つけられる可能性は低いことを忘れるべきでないということ。
- ③ よい文章を作るためには、古語や外来語も含めて出来るだけ沢山の同義語を集めることが重要であるが、同義語の意味に差異はなく同一であるという基本を忘れてはならないということ。
- ④ よい文章を作るためには、多くの書を読んで、多くの単語を覚えることが大切であるが、自分が記憶している言葉の意味と辞典に記されている意味には差異があることを忘れるべきでないということ。
- ⑤ 或る一つのことを云い現わすには出来るだけ沢山の同義語を調べることが重要であるが、それらの似たような言葉の差異に注意しながら最も適した言葉を選び出すことを忘れてはならないということ。

問五 傍線部B 「言葉も人間を使う」とあるが、どのようなことか。九十五字以内で説明しなさい。ただし、句読点、記号も字数に含む。

- 問六 空欄 a ～ d に入る語として最も適当なものを、それぞれ①～⑤の中から一つ選びなさい。
- | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| ①穴場 | ②場末 | ③座談 | ④高座 | ⑤座右 |
| ①克己 | ②庄巻 | ③手腕 | ④蛇足 | ⑤手配 |
| ①推敲 | ②助長 | ③専心 | ④杞憂 | ⑤集中 |
| ①永劫 | ②孤高 | ③虚空 | ④顯著 | ⑤無双 |

問七 本文の内容と合致しているものはどれか。最も適当なものを、次のなかから一つ選びなさい。

- ① 伝わりやすい文章を作るためには、読み手の記憶に強い印象を残すことが大切であるため、出来るかぎり新奇で耳慣れ
ない言葉を選択することが効果的である。
- ② 言葉の適不適を定めるためには絶えず文章全体との釣合を考えながらも、言葉の魅力に釣られて使役された方がよいと
きもあるが、学者が学理を論述する場合は別である。
- ③ 時代はつねに進歩し続けているため、わかりやすい文章を作るためには時代の変化に対応した新しい言葉を古語よりも
優先的に選択することが重要である。
- ④ よい文章を作るためには馴染みのある単語を選択することが必要であるため、出来るかぎり辞典を使用すべきでなく、
記憶の蔵に仕入れてある言葉だけを使うべきである。
- ⑤ よい文章を作るためには単語の選択のよし悪しが根本であるが、世間に通用する言葉はすべて辞典に載っているため、
辞典に掲載されていない言葉の使用は避けるべきである。

■

問 題 訂 正

2025 年度 一般選抜（前 期）2 月 2 日
国 語

訂正箇所

7 ページ 問題二 本文 9 行目

「拠」に振り仮名を加える

五

拠り所のある言葉よでも、耳遠い、
・
・